

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2674100124		
法人名	医療法人社団 洛和会		
事業所名	洛和グループホーム北花山		
所在地	京都市山科区北花山中道町109-12		
自己評価作成日	平成25年12月1日	評価結果市町村受理日	平成26年3月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku_ip/26/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=2674100124-00&PrefCd=26&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83-1「ひと・まち交流館 京都」1F
訪問調査日	平成26年1月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様と共に、家庭菜園を行っている。建物内が狭い分、外の空間を上手に活用し、ベンチを設置するなど、利用者様がゆっくり過ごせる時間(雰囲気)を作っています。
グループホーム北花山は、特に食事の場面に力を入れています。
家庭菜園で採れた野菜を使い、多種類の料理を作り、バランスよく食事を頂いています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

京都で初めて開設された洛和会勸修グループホームが北花山に移転され、5年余が経ち地域に根付いたホームとなっています。当時の利用者もスタッフも何名か左籍されています。利用者スタッフ、またスタッフ同士の関係がよいため、日常生活から本人のニーズをしっかりと聞き取り共有しています。そこから本人のできることを引き出し、継続してもらえようような趣味や作業をみつけ、その人らしい生き生きしたケアプランを作成、実践されています。そのため年齢が高くても日常生活動作が維持できているのだと思われます。昨年度法人の内部監査にて、数ある洛和会グループホームの中でNo.1施設として表彰されています。「第二の我が家」となる暖かいホームであるとともに、医療のバックアップがある家族にとっても、ご利用者にも安心してすごせるホームです。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらい 3. 職員の1/3くらい 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらい 3. 家族等の1/3くらい 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念を元に、ホーム独自の理念を作成し、玄関に掲示している。 また、理念についての研修・勉強会・毎日の唱和をしている。	職員で考えた事業所理念「その人らしい生活を支え、それぞれの力を発揮できる場所づくり」は、利用者により毛筆で書かれリビングに掲示されている。職員は日常生活において利用者により添い、傾聴、関係づくりを大切に実践に臨んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	回覧板の手渡しから、地域の催しに参加している。町内会に参加している。 3年前から行事の一環として餅つき大会や秋祭りをして地域との交流を図っている。	地域とは、お餅つきの招待、町内の祭り、隣の御旅所の神輿を見に行ったり、歩行訓練に町内の駐車場を使わせてもらう等親しく交流している。一方ホームの秋まつりには近隣に声をかけまた、包括支援センターと合同で保育園児対象の認知症サポーター講座に取組んだりし双方向の交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症ケアサポーター講座の開催など、事業所の特性を活用している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には、町内会長、民生委員、地域包括の職員、事業所職員が参加し利用者の状況報告や、行事イベント等に助言を頂き、次に活かしている。	会議では事業報告や今後の予定を報告し、参加メンバーから地域行事の情報提供や助言を得ている。前年度の町会長が地域代表として引き続き参加が得られ、目下家族の参加が乏しく日程調整に努めている。利用者は会議室への階段がバリエーになり参加は難しい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護事業部の組織として、連絡を取り合っている。	市町村担当課とは法人の担当部所が連絡を取っているが、新たに就任したホーム管理者としては日常的な相談や地域を理解する必要から議事録等の提出を機に連携を図っていきたいとの姿勢を示している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人として身体拘束の研修がありし、知識・意識の向上に努めている。 事業所で伝達研修を行い、スタッフ全体で理解を深め、取り組んでいる。	身体拘束の研修を行い、職員全員で話しあい、実践している。たとえばセンサーマットの代わりに布団やポータブルトイレに本人了解のもとに鈴をつけてみたところ、呼び鈴がわりに使用され、転倒が防げた例もある。帰宅願望の強い利用者には、思いに添い、一緒に散歩に出かけるなどの取り組みにより無断の外出が軽減できている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人として高齢者虐待の研修があり、知識・意識の向上に努めている。 事業所で伝達研修を行い、スタッフ全体で理解を深め、取り組んでいる。		

京都府 洛和グループホーム北花山

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人として権利擁護の研修があり、知識・意識の向上に努めている。 事業所で伝達研修を行い、スタッフ全体で理解を深め、取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、その都度に書面と口頭で説明して同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	京都市の『介護相談員』受け入れや、意見箱を設置している。家族への満足度アンケートを行い、意見を聞いている。	面会は、週1回、2週に1回とばらつきはあるが、来所時には日頃の様子を伝え情報交換の機会にしている。法人としては年2回アンケートを取り、サービス毎に介護事業部が集約し分析している。結果は事業所に届き、事業所として検討し運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスで職員の意見や話合う機会を作っている。日々のコミュニケーションからも意見を聞くように努めている。	新人職員は提案も取り上げてもらえ、風通しの良い職場と感想を述べている。職員会議は夕方スタッフが多い時間帯に設け、議題によっては、事前に職員全員から意見を求め会議を進めている。個人面談は半期に一度管理者により行われ運営面や仕事への要望等を聴取している。対職員のアンケートは法人の介護事業部で集約され、現場に結果報告がなされ、現場で検討し反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	半期に一度の『自己申告書』や、面談を行っている。また、その都度確認している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内で年間研修計画が立っている。研修の内容を職員に配布し受講を勧めている。外部の研修も参加しやすい体制である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH協議会に参加している。 研修・交流会等に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安な気持ちを理解し、安心して頂けるよう傍に寄り添い、話を聴く。得意なこと、やりたい事を伸ばし、ホームでの生活が充実したものとなるよう、関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面会時や電話時、利用者の普段の様子を伝えると共に、不安や要望を聞き、安心して頂けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談員と管理者で面接を行い、本人と家族の思いを傾聴し、支援の見極めをしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その方の得意なことを伸ばし、一緒に行っていく上で、頼られる存在であると感じ、共に支えあっていく関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	都度相談をし、状況を共有する事で、本人を支えて行く関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	その方と話す中で、なじみの物や場所、人を知り、家族や友人・知人の面会など、本人の関係が途切れないように支援している。	友人や親戚の来訪時は、リビングや居室でゆっくり話しが出来る様に配慮している。アセスメントから利用者の馴染みの事柄をみつけ、趣味や、思い出の中に出てくる場所に、例えば趣味の編み物の毛糸を一緒に買いに行く、出身高校を訪ねる、昔行きつけだった鰻屋に行く等利用者の話から出てくる思い出の場所への個別外出を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士での部屋の行き来、一緒に過ごす事により、職員とはまた違う関係を築けている。リビングでの席順など、なじみの方、話があう方等考慮し、工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了した方でも、郵便物の転送や、その後の付き合い(経過)がある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者とのコミュニケーションや家族からの情報から、本人の意向を汲み取るように勤め、本人の本意を尊重している。	利用者の在籍期間は比較的長い。担当者会議には「ご希望記入用紙」を家族に渡し意見を聞き、会議への参加を呼びかけている。利用者の好み・性格・食事・排泄・入浴に関すること・医師や看護師の健康上の注意をふくめ詳しく情報が収集され、利用者の思いや意向が具体的に読み取れる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者とのコミュニケーションや家族からの情報から、本人の意向を汲み取るように勤めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者とのコミュニケーションや家族からの情報から、本人の意向を汲み取るように勤めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族がケアカンファレンスに参加し、共にアイデアを出し合いケアプランを作成している。 沢山の意見が出るよう、スタッフ全員に事前に意見を聞いている。	介護計画はセンター方式を使用し、職員が利用者や家族、日々の観察から得た情報をセンター方式の一連のシートに丁寧に記載し、その人を彷彿とさせる介護計画や具体的な個別ケアが記載されている。評価は基本的には3ヶ月、変化がなければ6ヶ月毎に「見直し分析シート」をもとに話し合い、計画を見直し・更新している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気づきや結果は、ケア記録に書いている。 管理日誌や連絡帳を利用して、共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個別で外出したり買い物へ行く等、家族と調整して対応している。		

京都府 洛和グループホーム北花山

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	区役所との関わりから、地域すこやか学級の参加など、本人に合った支援を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、本人及び家族に決めてもらっている。 かかりつけ医と適宜連絡を取り合っている。	入所時にかかりつけ医については意向を確認している。内科は全員がホームの嘱託医に変更し月2回の往診を受けている。他科受診は情報提供はしているが、家族が受診に同行している。緊急時並びに、認知症専門医受診は系列の首羽病院を利用し受診を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週木曜に訪問看護あり、その際に気づきや情報の共有をし、ケアに繋げている。また、随時相談や指示を受けられるよう、積極的にコミュニケーションをとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は、随時病院関係者と連絡を取りあい、早期退院に向けて支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に説明を行っている。 重度化した際に、主治医・看護師や家族との話し合いを設けている。	法人として「みとり指針」が設けられており入所時に説明している。利用後状態変化等により必要とされる際には再度説明をし意向を確認している。過去看取りを1回経験しており、家族の同意・協力、医師・看護師・介護職員が共に勉強会を持ち受入態勢を整え対応している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人として研修があり、参加・伝達研修を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に訓練を行い、消防署などの関係機関と連絡・調整を図っている。	年2回の消防計画に基づく避難訓練のほか、二ヶ月に一回、ホーム前の駐車場への避難訓練、所内の消防機器の自主点検等を行っている。内容は分析し、報告書には話し合った改善点がしっかり書き込まれている。	地震や水害についても、運営推進会議に議題を提供し、地域の協力・協働等について話し合っておかれることを期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入職時と年に一度のマナー研修があり、丁寧な言葉づかい、笑顔をを心掛けている。	法人の人権・個人情報保護・接遇・職業倫理の研修を受け職員間で内容を共有すると共に、中でも当ホームではあいさつ・笑顔を大切に、利用者の話を職員同士で大きな声でしないよう注意している。フロアが広くないため特にトイレを誘う声かけは小声できるように申し合わせている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を尊重し、本人が決定しやすいような環境作りに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日のスケジュールは、大体しか決まっておらず、その日の体調や気分、要望により変更している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服選び等は、利用者と共に行うようにしている。外出の際は、お化粧をしたり、おしゃれが出来るよう声かけ、手伝いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホームの庭で家庭菜園に取り組み、育てることの楽しみ、食べることの楽しみを提供している。利用者に合わせて、献立を決める、野菜を切る、味付け、盛りつけ、配膳、下膳をしている。	玄関横のプランターに多種類の野菜を植え、収穫や食事の楽しみに繋がるよう栽培している。献立は利用者のリクエストや、料理番組からヒントを得て、利用者が調理しやすいように、テーブルにコンロを置き炒め物をする。野菜を芯に豚肉巻きを手伝ってもらいと、きめ細かく考えられている。食欲が出るように工夫し、利用者・家族からも好評である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個別で食事摂取量や、必要に応じて水分摂取量などを記録している。献立は、利用者と一緒に考えながら、食事のバランスや量を確保している。また、利用者によって、食べやすい大きさに切るなど、提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケアの介助と、週に一回の歯科衛生士によるケアで、支援を行っている。		

京都府 洛和グループホーム北花山

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の記録を付けて、本人の排泄パターンを把握する事により、本人の負担を軽減できるような支援を行っている。	職員は利用者を観察し、さりげなく声かけ、見守っている。訪問看護師はむくみなどから排泄記録を確認している。家庭でオムツ着用だった利用者が声かけや夜間トイレ誘導によりオムツがはずれた例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェックを記録し、本人の排泄パターンを調査する。下剤だけに頼らず、日中の運動、水分補給、ヨーグルトの摂取等、その方に合わせた対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日等は決まっておらず、外出予定などの他の事情に考慮して、入浴していただく支援を行っている。希望の湯温や、同姓介助、希望の時間に合わせてゆっくり入浴して頂いている。	浴室は家庭並みの規模で、マンツーマンの介助により一人約30分程度入浴にかけている。足が冷たい人には入浴日以外でも足浴をし、喜ばれている。シャンプー等は好みを聞き使用、季節湯は欠かさない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の状態をみて、昼寝を進めてみたり、記録に睡眠の時間帯を記入し対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の説明を、確認するシステムを構築し、用途や副作用・処方量等の確認に努めている。薬が変わった場合、薬剤師、看護師、往診医に質問できる体制ができています。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者個々で、それぞれ得意な事で活躍出来る場面を作れるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	マンツーマンで個別対応に努め、買い物や散歩に行くように心がけている。普段は行けない所も、個別外出を企画し、その方の希望にそって、マンツーマンで外出できるように支援している。	ホームの前は駐車場になっており、広目の敷地を歩行訓練の場に可能な限り活用している。疲れたら玄関横のベンチで休んでいる。近隣にはスーパーマーケットもあり、食材の補充に散歩がてら出かけている。車椅子の人も花を見に行く等、出かけている。同法人系列のグループホームが複数ヶ所近隣にあり普段の外出先に利用し、行事の招待を受けよく行き来をしている。なお、季節の行事には家族にも声をかけ出かけている。	

京都府 洛和グループホーム北花山

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	日々の買い物等のシーンで、個別で買い物をしたりしている。 家族に了解を得て、小額なら自己管理されている利用者も居る。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があれば、自由に使える状況である。 当然、込み入った内容の電話であれば、自室で連絡する事も可能です。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家具は一般家庭にある物を使用している。 日々の会話の中で、季節の話題を提供したり、雛人形や七夕・クリスマスなど、四季折々の飾りでレイアウトしている。	玄関を入るとカーテン越しにすぐリビングダイニングになっている。利用者との距離も近く、親しみを込めた挨拶や声かけが返ってくる。リビングの窓は二重カーテンになっており強い日差しが調節できる。オープンキッチンからは、調理の音や香りが漂ってきて食欲がそそられる。人から少し距離を置き過ごしたい時は居室へ向かう廊下にソファが置かれ過ごせる場もある。リビングの雰囲気は和やかで利用者、職員間が交わす会話が心地よい。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングが狭いので、独りになれる様なスペースはありませんが、気の合う利用者同士が、自然と同じテーブルに着く様な配慮を心掛けている。ホーム前にベンチを設置し、独りになりたいとき、気分転換の際などに利用している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が使い慣れた家具や小物を持参していただく事により、出来る限り自宅の雰囲気を出し、その人らしい空間になっている。環境の変化に配慮している。	居室には好みの表札を掲げ、室内はカーテン・ベッド・タンス・照明器具などそれぞれ好みのものが持ち込まれている。ゆったり座れる椅子を入れ、洋風にしたり、ホットカーペットを敷き和風にするなど人それぞれの暮らしが窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや洗面所、各居室に表札を付け分かりやす工夫し、GHが利用者の家である事を表現する工夫をしている。		